

のを諏訪で採り、ビロードシダの二裂しているのを木曾の中部でみつけたことは別に述べてある。

着生シダは高地にあるものもあった。南アルプス豊口山はトヨグチウラボシの発見地であるが、この大きな岩壁にはヤツガタケシノブも着いていた。これは八ヶ岳で発見されたことから両種は高地性であることがわかる。

ミヤマウラボシも同様に各地で時々見られた。

以上いろいろの着性植物を見て楽しんできたが、キレハオオクボシダのように極めて珍稀なものが、この手であるいは絶滅したのではないかと思うと胸が痛む。この小文が若い研究者のために多少の参考になればと思ってこれを草した。

アザミの雑種についての補記

奥原 弘人

先に上高地その他でアズマヤマアザミとノリクラアザミとの雑種と認められるものを見てカミコウチアザミと呼ぶことにしたことを述べ、木曾川上流の味噌川谷でも両種の雑種と思われるものを見たことも別の紙面で述べてあるが、味噌川谷のものは写真のように長枝を分けず頭花は短枝によって2~3個ずつ集まって着き、頭花は遥かに小さく総苞片の開出部は極めて短く、全体としてアズマヤマ

アザミに近い形である。これを上記の名で呼ぶことは適当でないと考え、地名により和名をミソガワアザミとしたい。

なお、古い野帳を調べていたところ、明科町の山中でアジアザミとトネアザミとの雑種と見られるものを見たことが記されている。しかしその写真は見当たらず標本についての記憶もないので、再び現地を調べたいが、その体力もないことが残念である。



写真1. ミソガワアザミ